

「在華『靖國型』神社」：

中国本土・台湾・満洲における「靖國思想」の具象化の場

ロンドン大学SOAS 霍昶璋

近代「民族国家」の構築過程において、権力者は往々にして、国内外の争いにおける自派の戦死者を顕彰する施設を建設することで、自らの政権の正当性を強調し、さらには国民のアイデンティティを構築する手段の一つとする傾向が見られる。

明治期に入った日本は、全国の神社を再編成し、天皇家の御祖神とされる「天照御大神」を祭る「伊勢神宮」を頂点とする社格制度を確立することで、神話的観点から天皇の統治の正当性を確立した。同時に、国は東京の九段坂上に鎮座する「靖國神社」を中核とし、各道府県の「護國神社」を外延とする「戦没者追悼施設」のネットワークを構築し、「天皇と国の為に忠死したもののたちの魂を招き、英霊と称される神として慰め、奉齋し顕彰する」という「靖國思想」を確立し、日本国民に教化した。これにより、一般臣民を祀る靖國神社は、伊勢神宮と共に戦前の日本国家の国体を支える二つの精神的支柱となった。

一方、日本の対外拡張の開始に伴い、国家神道の基本要素であり、宗教儀式的象徴的な場所でもある「神社」が、台湾や満洲を含む「中国」に広がった。本研究は、約490社に及ぶ「在華神社」の中にも、前述の「靖國思想」を受け継ぎ、「靖國神社」や「護國神社」を模して設置されたものがいくつかあったことを主張する。これらの神社が中国における「靖國思想」の具象化の場であり、靖國神社と機能的・役割的に類似していることから、本研究ではこれらを総称して「在華『靖國型』神社」と呼び、位置づける。

日本の敗戦後、これらの「在華『靖國型』神社」を含む旧日本神社は中国国民党政権とその後の共産党政権の手に渡り、様々な処遇を受けた。中華民国中央政府は1945年末に「国家の為に犠牲になった烈士」を記念し祀る「忠烈祠」を各省・市・県政府に建設するよう指示し、地理的条件や自然景観に恵まれた旧日本神社を改造の主な対象としたが、もう一つの大きな理由は日本の植民色彩を取り除くことであった。この計画は、国民党が「第二次国共内戦」の失利に伴い、中国大陸での実施を余儀なくされたが、台湾においては引き続き実行された。一方、新たに樹立された中国共産党政権による、これらの神社に対する具体的な扱いについてはまだ不明な点がいくつかあるが、国民党政権と同様の方法を取り入れていないようである。

この研究背景を踏まえ、本報告では「靖國思想」を研究の切り口とし、上述の新たに提唱された「在華『靖國型』神社」というコンセプトを定義し、その選定基準を提案することを試みる。さらに、本報告ではこの基盤の上に、現段階で選定された事例について紹介し、特にその「戦前」「戦後」及び「現在」の状況に焦点を当てることとする。本研究の最終的な目的は、この種の神社を通して、それらが近代における日中両国の「民族国家」とアイデンティティの構築において果たす役割を明らかにし、大日本帝国、中国国民党政権及び共産党政権が如何に自らの利益の為にこれらの場所を利用していたのかを探求することである。